

## ！危機！ 世界自然遺産ガラパゴスの昔と今

伊藤 秀三  
(長崎大学名誉教授)

### 要旨

ガラパゴス諸島に日本人がかかわった歴史をまず振り返る。1932年、朝枝利男はカリフォルニア科学アカデミーのテンプレートン・クロッカー探検隊に参加し、日本人として初めてガラパゴスの土を踏んだ。このとき、当時は未踏だったサンタクルス島の最高峰(のちにクロッカー山と名付けられる)に初登頂。第二次大戦後1959年、ダーウィンの「種の起源」発刊100年を記念して、東京水産大/海鷹丸に研究者9名が調査を行う。1964年、カリフォルニア大学のGISPに私が参加した。このあと個人的な調査研究がいくつか行われた。1999～2001年、PECCによるエコツーリズム調査が行われる。2004年～、JICA海洋環境保全プロジェクトが続く。

ダーウィン研究所(1964)と国立公園管理局(1968)が設立され、陸域97%の国立公園区域と3%の居住農耕区域の境界が定められ、1974年の国立公園基本計画にエコツーリズムが組み込まれてから、21世紀へ尾を引く変化が始まった。まず自然景観や野生動植物をお目当てにしたエコツアーが世界的な評価を得て探訪者が急増し、それに伴う経済活動が職業機会の幻影を生み出し、人口の流入、にわか漁民を生んだ。同時に外来動植物が急増し、その大部分は居住農耕区域の中にあるが一部は公園区域にも侵入してきた。この期間、未整備だった居住環境は整えられ、道路は舗装され、電話も諸島内外に通じたが、廃棄物や排水の処理は整備途上である。

1987年、ダーウィン研究所ではガラパゴス植物学WKSが行われた。そのとき私は、植生研究の結論の一つとして、海拔600mの高地に樹木が生育せず自然草原が発達する理由として、高地環境が過乾燥と過湿潤の両極に揺れること、そのような環境に耐えうる樹種が自然渡来していないことをあげ、樹種によっては草原にも生育可能との仮説を述べた。このことは1990年代後半、外来樹種シンチョナの草原への侵入によって不幸にも立証された。本種は固有種ミコニア低木群落、固有種スカレシア高木群落にも侵入し、また外来キイチゴと外来ジャケツイバラの1種は林縁にマント群落を形成し、スカレシア林の中にも侵入し始めている(2005年現在)。

国立公園管理局とダーウィン研究所は、野生化していたウシ、ロバ、ヤギの駆除(イサベラ・プロジェクト)をすすめて、2006年に完了させた。その途上においては、固有植物を柵囲い保護して野生化動物による食害から護った。しかし1990年代になってもカエル1種、ハチ2種が帰化している。帰化植物の完全駆除は容易ではないが、ダーウィン研究所は駆除方法を開発し、メディアルナ山からはシンチョナを駆除し、2種のキイチゴは農耕地区だけに帰化していた段階で完全除去した。エルフンコではミコニア群落を、サントトマスではスカレシア・コルダータ高木林を植栽復元させた。ペラピスタでは民有地のなかでスカレシア・ペデュンクラータ高木林の復元が日本ガラパゴスの会/ダーウィン研究所の共同事業として進行中である。

外来樹種の国立公園区域への侵入が起きているのは、幸いにも人が居住する4島の居住農耕区に接している箇所だけである。無人島では外来樹種の侵入はない。そこでは、ダーウィンが見たであろう無垢の自然と生物をいまでも見ることが出来る。半世紀にわたって国際的な支援と拠金で保護が図られてきたところは、世界にガラパゴスしかない。ガラパゴスからダーウィンは生物進化論の着想を得たし、グラント夫妻はフィンチの進化機構を解明し、バジェはコパネウの繁殖生態で世界を驚かせ、新たなDNA解析は固有属植物ダーウィニオタムヌス(ダーウィンの灌木の意)の起源と進化に光を当てた。ガラパゴスは、人類が汲み出すべき知の源泉であり、自然の実験室/研究室であり、自然博物館であり、思索と感動と興奮の場であり続けるであろう。